

# 呉錦堂を語る会通信

NO.32 Apr. 2017

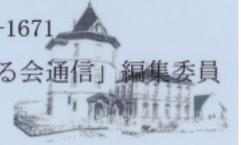
発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘 雄三 方「呉錦堂を語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「呉錦堂を語る会通信」編集委員

発行日 2017.4.1



## 上ノ山（山電「舞子公園」駅北東すぐ）の呉錦堂邸跡の特定

先日、神戸外国人居留地研究会会員の田中正文氏から、山陽電車「舞子公園」駅の北東すぐのところにあった呉錦堂邸について、貴重な情報をいただきました。本第32号1～3頁の記事は、田中氏提供の情報があって生まれた報告であり、深謝申し上げます。  
(編集委員 橘 雄三)

### 《1. 上ノ山・呉錦堂邸の位置》

上ノ山にあった呉錦堂邸について、番地は「上ノ山1752-1」であることは、本『通信』第24号で述べ、また、ここでの呉家の生活の様子は、邸宅の見取り図や呉家の人々の写真と共に、第28号で紹介いたしました。

ところで、呉邸の位置については、第24号で、「この地は現在、苔谷（こけたに）公園の南、神戸淡路鳴門自動車道の下になっております」と記述しましたが、「ここ」と特定する情報を持ち合わせておりませんでした。

この点について、田中正文氏からお借りした、松浜善正著『舞子、舞子の浜 秘話』（2004 双良文庫）掲載の地図（右の段、上。部分拡大）と現地写真（右の段、下）から明確に特定することができました。特に、決め手となったのは、地図に表示された「土がけ」の記号と現地写真との比較・一致です。



「土がけ」記号

### 《2. 上ノ山・呉錦堂邸についての『秘話』の記述》

上掲『秘話』「12. 別荘余聞 2 呉錦堂氏の上の山の別荘」から引用します。

呉錦堂氏が「舞子の浜」に最初に別荘用地を購入したのは明治38年頃のこと、その翌年に現在のJR舞子駅の北側に当たる山を購入している。そして数年後に当初は中規模の別荘を建てている。ここは字「上の山」と呼ぶ、丁度舞子公園の中に建つ六角堂から、北西に直線で400メートル程離れたところにある大変眺望の良い高台で、駅に近く、西国街道にも近い交通の便の良いところだった。この別荘は広い敷地の中にテニスコートや噴水池等が作られていた。建物は数棟建っていたが、その中で一番北側に建っていた木造の二階建ては、洋館風に外壁が板の横張り、ペンキの色が公園の中の六角堂と同じ

ミドリ色に塗られていた。多分呉錦堂氏はこの色が好みだったのでしょう。（下線は編集委員が加筆）

上記引用文中、下線部分は目新しい記述です。



上の地図中央、呉錦堂邸西の「土がけ」記号（朱色部。編集委員着色）『秘話』では、「この地図は、国土地理院の1:2500国土基本図を使用したものである」と注あり。



現在の呉錦堂邸跡（駐車場部分）。写真中央部、木立の後ろ及び右手、カーブ部分が、上の地図の呉錦堂邸西、「土がけ」記号の位置と一致します（編集委員撮影）

## 外構、及び「土がけ」擁壁は上ノ山・呉錦堂邸の遺構！

### 《3. 外構、及び擁壁は上ノ山・呉錦堂邸の遺構》

上ノ山の呉錦堂邸の土地は、昭和25年(1950)、愛徳童貞会に譲渡され、「聖マリアの園」という幼稚園になっておりました。1992年、この幼稚園も、明石海峡大橋建設工事に関連し、舞子台8丁目へ移転、この地は現在、大橋の下、駐車場になっております。

この駐車場の西端に現存する①階段入り口横のブロック外構、及び②「土がけ」擁壁について、田中正文氏は、「呉錦堂邸の遺構ではないか」とおっしゃいます。この点について、呉錦堂の孫、呉伯瑄氏に、写真を送り問い合わせ、「そうです。間違いありません」との返事をいただきました。



45.5cm、19.1cmで、サイズは異なります。模様については、同じではありませんが似ているともいえます。形、模様には、いくつかのバリエーションがあったでしょうから、これだけの調査では、呉錦堂邸跡地に現存するブロックが呉錦堂ゆかりのものであるともないとも結論付けることはできません。呉伯瑄氏も「そこまではわかりません」とおっしゃいます。情報提供をお待ちしています。



擁壁最上部、3段に組まれたブロック

では、次は、外構、及び擁壁に使用されたブロックの由緒です。このことについて、編集委員は、呉錦堂邸跡に現存するブロックと④孫文記念館展示の「松海別荘の擬石ブロック」のサイズ及び模様を比較してみました。「松海別荘の擬石ブロック」とは、1913年、孫文の松海別荘来訪時、別荘玄関前で撮った集合写真に写っている外構の建材にもなっている化粧ブロックです。

呉錦堂は明治40年に「東亜セメント株式会社」、同44年には、「田岡式セメント石合資会社」を設立します。上述化粧ブロックは、「田岡式セメント石合資会社」で製造されたものです。

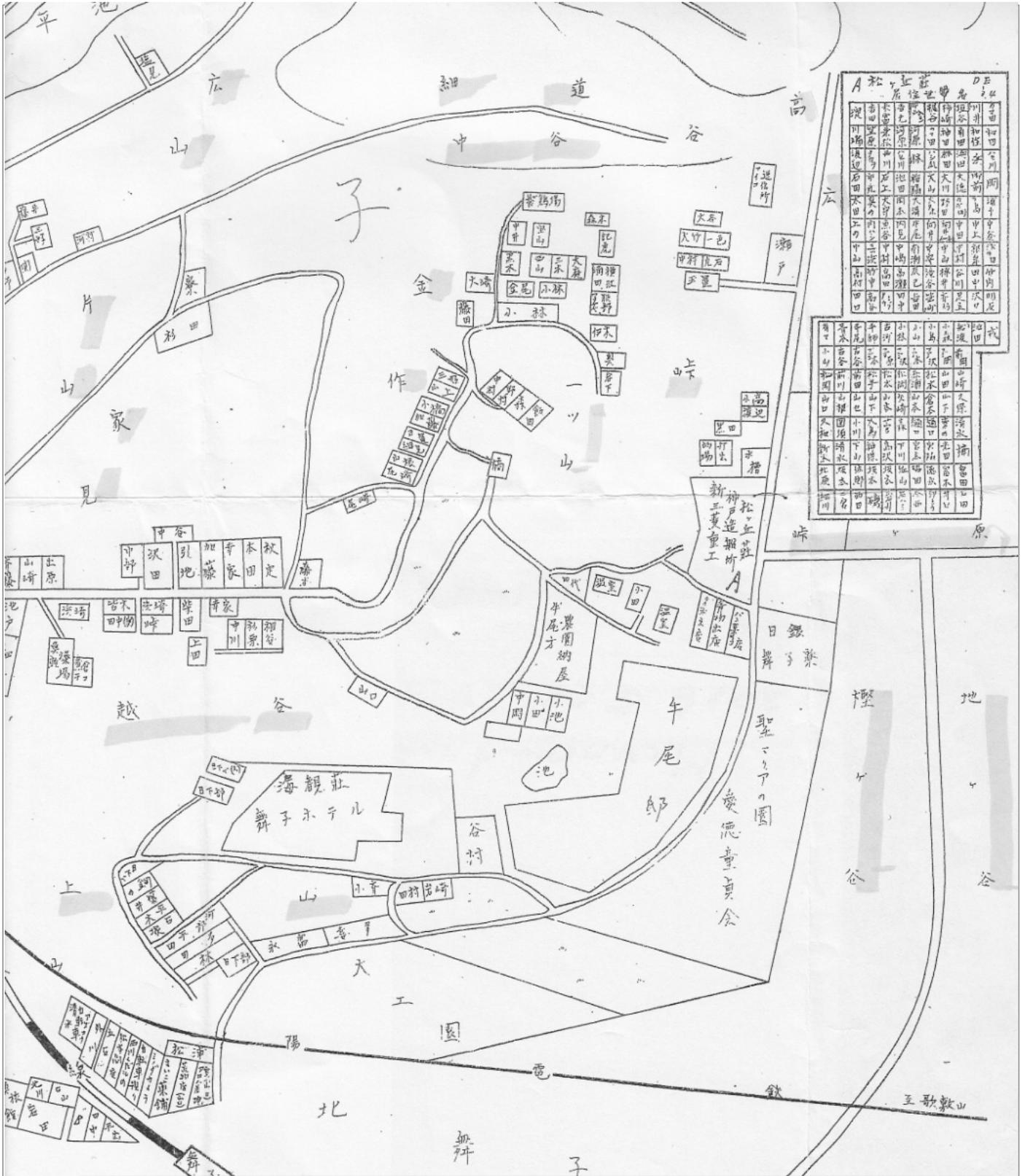
結論から言いますと、上ノ山呉錦堂邸跡のブロックは、縦19.8cm、横60.2cm、幅22.9cmと、ずいぶん横長で、写真③のような模様です。これに対し、孫文記念館展示のブロックは、それぞれ、20.45cm、



(この頁の写真はすべて編集委員が撮影したものです)

### 昭和30年頃の舞子駅北方住宅地の様子

下の地図は、上ノ山にあった呉錦堂邸の土地が愛徳童貞会へ譲渡された5年ほど後、昭和30年頃の舞子駅北方の様子です。図では、元の呉錦堂邸の土地は聖マリアの園愛徳童貞会と表記されています。道を隔てて向かいには生尾邸。間の道を北上すると、字峠です。新三菱重工神戸造船所松ヶ丘荘、さらに北上すると瀬戸邸と続きます。すべて、『通信』第24号に掲載した、呉錦堂の孫、呉伯瑄（ご・はくせん）氏の話に関連して出てくる固有名詞です。三菱重工関係の施設は明石海峡大橋建設工事に関連し、そのほとんどがなくなりましたが、その一部は、大橋の東、側道に沿って三菱重工神戸造船所松ヶ丘社宅として現存します。



神戸地学協会発行「神戸市全産業・住宅案内図帳（垂水区）」昭和31年版（田中正文氏提供）を使用

# 呉錦堂は「表には名前を出さず」、孫文を支援していた

本『通信』第31号で、陳舜臣著『囚人の斧』を取り上げました。同作品の一節、松海別荘前で記念写真を撮る件（くだり）、陳舜臣は次のように描いています。

「写真。……ああ、それはいいですな」

孫文は呉錦堂をかえりみて、呟くように言った。

（あなたとの関係は、写真にでもとっておかないと、なにも残らない）

呉錦堂は孫文の呟きのなかに、そんなことばをきく思いがした。

『囚人の斧』は小説、フィクションではありますが、『通信』編集委員は、この箇所にかたわり、第31号の

4頁で、呉錦堂と孫文の関係について言及しました。

ここでは、呉錦堂が、「表には名前を出さず」に行っていた革命支援、孫文支援について、『孫文研究』第46号、安井三吉論文「楊寿彭と孫文」（2009年）から、結論的な箇所を引用し、紹介いたします。

（補注）楊寿彭（1881?-1938）は呉錦堂（1855-1926）の還暦祝賀行事の総幹事を任され、また、呉の葬儀を主宰しております。このことは、呉錦堂と楊寿彭の親密な関係を表すと同時に、楊寿彭が華僑社会を代表する存在であったことを表しているといえます。

（編集委員 橋雄三）

## 《1. 「楊寿彭と孫文」からの引用その1》

ところで呉錦堂は、国民党神戸交通部解散後は、政治運動を表だってしなくなる。他方、楊寿彭は、中華革命党の副部長として、王敬祥とともに孫文の革命運動を支持し続けた。呉錦堂と楊寿彭の関係は、長子楊永康の言葉をかりていえば、呉錦堂は「革命事業に対して、財政的な支援は非常に多かったが、しかし、表には名前を出さず、多くは先父（楊寿彭）を通じてそうしていた」というものではなかったかと考えられる。

## 《2. 「楊寿彭と孫文」からの引用その2》

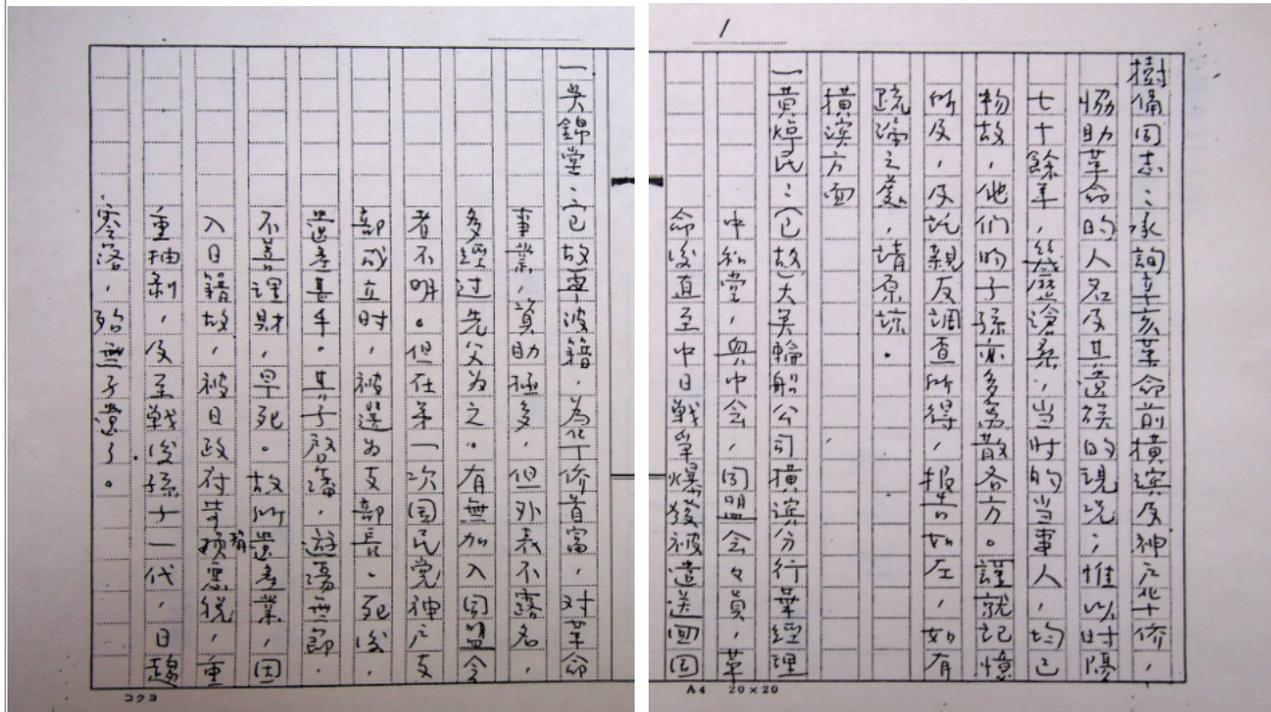
呉錦堂は、13年7月の第二革命以降、孫文支持の活動は表面では回避したが、楊永康が回顧していたように楊寿彭を通じて財政的な支援を続けていたものと思われる。二人は表裏一体の関係にあったと考えてよいだろう。

## 《3. 楊永康「樹備同志」》

上掲、安井三吉論文が引用している資料の一つに、楊永康「樹備同志」（1981年）があります。これは、神戸華僑歴史博物館所蔵、陳徳仁コレクションに属するもので、手書き原稿用紙10枚からなっています。辛亥革命に協力した横浜、神戸の華僑、並びに遺族の現況の記録です。

すでに、70余年たった今、当事者は、みな、故人となり、その子孫の多くが離散しているなど、情報収集の不十分さをことわった後、横浜方面で、黄焯民、温炳臣、鮑博公の三人、神戸方面で呉錦堂、王敬祥、楊寿彭の三人について記しています。特に、父親、楊寿彭については詳述しています。

呉錦堂については、下の画像のとおり、150字ほどの記述です。文中、「対革命事業ノ資助極多、但外表不露名、多经过先父为之」とあります。



画像←、右の原稿用紙半枚は「樹備同志」の冒頭部分です。左の半枚は、呉錦堂についての記述部分です。